

のとし、また単なる隱遁僧にとどまらず將軍家、天皇家までその信仰が及んだという事実を見たとき、「普及本」の伝記ではわからない新たな祐天像というものが形成されなければならない。

第三章

● 祐天の行蹟に対する 一考察

● 第一節 祐天の現世利益

第一項 悪霊祓い

第二章において、長々と祐天の生涯を横割りにして見てきた。まだまだ明らかでないことも多く、未調査の史料も残っている。しかしながら、たとえ不完全であっても一度まとめおくことが今後の調査研究へ役立つと信じるものである。

次に、これまでの調査研究の結果から、祐天の生涯を通して見たときにどのようなことが言えるのかを考察しておきたい。

祐天の名は、飯沼弘経寺の隨身時代の死霊得脱を巡る事績から広まっていったことはまず間違いがないであろう。

このような祐天の人生の転機となったような事績は、祐天のどのような宗教観から来ているのであろうか。三十七歳浄土教の学問を始めて二十五年を経たときであった。このときの祐天の立場は明確ではないが、檀通を師と仰ぐ所化であったことは間違いない。田舎の檀林に医学の発達していない当時、難題が持ち込まれたのである。阿弥陀仏は往生を約束しているのであるが、現実に狂乱し苦しんでいる人を目の前にしたときに、修行僧に何ができるであろうか。医者もさじを投げ、村人からも相手にされなくなってきた女性に対し、心ある村人が最後に頼ったのが弘経寺にいた僧侶祐天だったのである。二十五年間勉強した中におそらくその解決法はなかった。そこで祐天は悩んだに違いない。悩んでも得られた答は阿弥陀仏の本願に憑むことに変わりはなかった。狂乱した女性の気を鎮めるために百萬遍の数珠を作り一心に念仏することによって、村人との一体感をも作り出していった。これを続けることによって、幸いにもその女性の気も鎮まっていった。当時の馮霊信仰と相まって、祐天の名は静かにしかし確実に広まっていったのである。

このことを祐天自身はどのように考えていたのであろうか。祐天が純粋な浄土教者であったことは、祐天の思想を見ていけば証明することは可能である。このことについてはのちの論文のテーマとして、今は一般的な馮霊信仰と仏教の関係を探ってみたい。

古代より物の怪的な憑き物の信仰と仏教、特に密教とのかかわりが指摘されている。もとは空海の修した後七日御修法による玉体加持から始まったものとされる。それが重病にかかった僧侶を不動法を修して平癒させたなどの靈驗記から、貴族から庶民へと民俗化していく過程の中で、馮靈信仰の加持祈祷による除滅へと変化していったものと考えられている（山折哲雄『日本人の靈魂観』河出書房新社、昭和五十一年）。

祐天の事績を考えたとき問題となるのは、密教から来た修法が明らかに病氣平癒などの現世利益を目的としたものであったことである。浄土教の僧侶として学問をし、相承を受け実践をしてきた祐天は、今現に苦しんでいる人を見てどのような気持ちで百萬遍を修したのであるうか。

近年、高田衛氏は祐天を称して「悪靈祓い師」と言った。それも、馮靈を現実のものと認めかつ除滅を目的として念仏をしたとする解釈にならなければ、それほどのこととは言えない。

第一に馮靈を祐天が認めたかということであるが、浄土宗の教義から言えば無記の立場と言うことができよう。すなわち人間の考えの及ばないことと捉えていたと思われる。ただ当時の医学や科学の知識から言えば、当然不可思議なるものという漠然とした概念での存在を認めていたことは想像できる。しかし、祐天の見方は、その死霊などの怨念に執着することはなかったであろう。そして、狂乱した人の病気を治すのではなく、後世を願った念仏をしたと言ったほうが正しいであろう。そして、極言すれば、祐天が十念を授けたのち、その人

の病気が治ろう治るまいと関知するところではなかったのである。目標はあくまでも往生にあるからである。このことは伝記中に出てくる名号の験益は「信者の信力」によると明解に言い切っていることなどから推察することができるのである。

「普及本」の系統では、いずれも悪霊得脱を目的として祐天が活躍していることも、この問題の理解を妨げている。

一般に悪霊祓いを目的として念仏をした例があるのであろうか。伊藤唯真先生（『仏教民俗学』講座・日本の民俗宗教2、昭和五十五年、三六二頁）によれば、祈祷の機能はあつたと言わねばならない。疫病などの流行により百万遍を修した例は多く見出される。しかし、鎮魂はあつても悪霊祓いの例は指摘されていない。もし、祐天が意図してそうしたならば、隆光らと綱吉の前で真つ向から呪術比べを行つたに違いない。しかし、そうはしなかつた。そして、綱吉とは理論で勝負したのである。

明確な言葉としては出てこないが、儒教倫理を尊び、祈祷に走つた綱吉と堂々と渡り合つた理論というものには、合理的な浄土教理論の展開があつたと言わねばならない。そこでもし祈祷と念仏の力比べのような話になつたとすれば、祐天は綱吉の気をひくだけの根拠を示せなかつたのではあるまいか。

また、もし浄土教義を逸脱した行為をしていたならば、檀林主になるときに、当然宗内から猛反発が出たろうことが予想される。しかし、それもなかつたようである。さらに言えば、

祐天には大勢の弟子がおり、なかには観徹のような学者もいたのである。そして何よりも一番弟子である祐海は二十四歳（祐天伝通院住職時代）にして『愚蒙安心章』を著し、その最初に「浄土宗祈祷の事」と言う題名で見解を述べている。奥書きにおいて祐海は「師に常隨給仕し衆人に対し教化し玉ふ安心のおもむきを粗憶持せんかため筆記」したとし、

今思に難有事あり此書近従の僧某に隠しひそかに師の高覧に入るにや或時師の仰せにあれハよふ書たなど御称赞ありき右此書ハ殊之外古ひたり故に粗再治し清書する者也

と記す。

その内容は、祐天の思想に迫るものと考えられるが、今その詳細な検討はさしおき、問題となる箇所のみを抜いてみたい。

夫祈祷の意地をいはば、滅罪生善とて罪をほろぼし善を生るを以、祈祷とせり故に祈りのらるゝ意にただく菩提心ありといへども祈る心に唯現世を執しまた、たまたまいのる心実有といへともいのらるる心に誠なければ佛神の本意にかなはざる故、かつて得益なし

現世に執し菩提心なき祈りいかでか佛意に叶はめ爰を心義門には、天下和順等
の勝れたる現益乃経文ありといへども穢土を厭い浄土を欣ふを本意として南無阿
弥陀仏と浄土に廻するの時は彼土の功熏此土に熏じて現世安穩なりといへり。故
に所願なりて祈祷を作さば、厭願の意地を本として滅罪生善を念ずべし

祐海の著作であるが祐天の言葉と解せば、祐天は祈祷を祈る心としてそこに誠がなければ願は成就しないこと、そこに現世に執着する心があつてはならないことを述べているのである。

この見解は、浄土宗の教義を出ないものと確信する。したがって祐天の行った行為は悪霊解脱を目的としたものではなく、狂乱した女性の往生を願うためのもので、村人とともに誠の心で実践をしたものであり、その結果としての善の一つの表れの中に、その女性の精神が安定してきたと見るべきものなのであろう。

祐天の行った実践と結果が庶民の間に真に理解されず、念仏が除跋したという短絡的な見方になり、後世の「普及本」伝記の発生につながったのではなからうか。

しかし、祐天にとってはそれが幸いした。そのようなインパクトがなければ一介の隠遁僧を桂昌院が取り上げるといふことはなかつたであろう。とにかく祐天の想いとは裏腹に世に流言は広まっていったのである。